

ペドロ・メイヤー 著

C. NAHUSTLECAS  
LOTE 30

アフスコ地区

ミラマール・コレクション



アフスコ地区

ペドロ・メイヤー著

ミラマール・コレクション

60年以上のキャリアと100万点を超える写真アーカイブを持つペドロ・メイヤーは、この常に進化し続ける作品にまつわる多様な物語を共有する使命を引き受けています。これらの物語は、彼の写真家としての視点だけでなく、彼のキャリアを通じたギルド活動の重要な一面も含んでいます。

ミラマール・コレクションは、1950年代から現代の最新技術である人工知能の導入に至るまで、彼の写真技術の発展を記録した41巻以上の回顧的かつ自伝的な集大成です。

アフスコ地区

メキシコシティのコヨアカン南部に位置するアフスコ地区は、ペドレガル・デ・サントドミンゴやラ・カンデラリアと同様の火山性地域にあります。シトル火山の黒い溶岩台地の上に、初期の住民たちは荒涼とした溶岩原を活気あるコミュニティへと変貌させました。彼らは岩を動かし、道を切り開き、家を建て、地域社会を築き上げるために懸命に努力しました。

一方で、ルイス・バラガンがこの地域の溶岩と固有の植生を生かしサン・アンヘルのパドレガルを設計していた頃、アフスコの住民たちは水や電気の供給といった課題に直面していました。50年前、ペドロ・メイヤーはカメラを通してアフスコの日常を記録しました。ラ・ボラ市場から集会やお祝いまで、彼の写真は溶岩の大地から生まれたコミュニティの本質を捉え、充実した意義ある生活を築く姿を映し出しています。

## 法的ページ

### 編集部門

ペドロ・メイヤー財団

### コレクション統括

マリソル・モリーナ

### ペドロ・メイヤー・アーカイブ

エレナ・ロサレス

### 編集者

ペドロ・メイヤー

アレクシス・オルティス

### 共編集者

シメナ・サンパヨ

### 画像ポストプロダクション

ペドロ・メイヤー

アレクシス・オルティス

### 執筆者

ルベン・アギラール

ペドロ・メイヤー

サルバドール・ウエルタ

### スタイル校正

テレサ・マルティネス

### 編集管理

パブロ・メイヤー

### 編集デザイン

アレクシス・オルティス

カルロス・メンドーサ

### 制作アシスタント

ビアンカ・セグンド

リズベス・バレンケ

アレハンドラ・マルティネス

© ペドロ・メイヤー、2025年

[www.pedromeyer.com](http://www.pedromeyer.com)

本書の内容は、著作権者またはその相続人による事前の書面による許可なく、アナログ・デジタルを問わずいかなる形態や手段でも、いかなる目的であっても複製することを禁じます。

メキシコシティ、コヨアカンにて編集

ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、日本語の5言語での翻訳がQRコードからご利用いただけます。

初めてアフスコに連れて行ってくれた友人、ルベン・アギラール・モンテベルデへ。

アフスコ地区で過ごした年月  
ルベン・アギラール著

1972年6月、私はメキシコシティ南部のコヨアカン区にある溶岩台地のアフスコ地区に引っ越してきました。同じ地理的空間でありながら、溶岩によって形成された起伏の中に、正反対の二つの世界が共存していました。一方は貧困、もう一方は富裕です。

当時私は25歳で、代替的な大衆教育プロジェクトを開始するためにこの地区にやってきたイエズス会の共同体の一員でした。哲学の学業を終えた後、イエズス会の修道士たちは神学の学びを始める前に、約2年間、イエズス会の活動の現場で働きます。私たちは「マエストリーヨ」(イエズス会の修道士がこの修行段階で呼ばれる名称)4人と、アルベルト・ナバロ神父という責任者のもとで、アフスコ・プロジェクトを始めるために派遣されました。

1970年、メキシコのイエズス会管区長エンリケ・マルティン・デル・カンポ神父は、長年続いたエリート教育機関であるパトリア学院を閉鎖する決定を下しました。この決定は国内外に大きな波紋を呼び、ニューヨーク・タイムズをはじめとする新聞でも報じられました。イエズス会は何世紀にもわたり続けてきたエリート教育から手を引き、より貧しい人々に向けて力を注ぐことにしたのです。

パトリア学院閉鎖後に設立された組織は「文化・教育振興協会(Fomento Cultural y Educativo, A.C.)」であり、その最初の大衆教育プロジェクトがアフスコ地区に設立されました。イエズス会の私たちはそこで生活を始めました。最初は「譲渡」という形で得た侵入地にある段ボールの家に住んでいました。この「譲渡」とは、その土地の最初の侵入者が権利を売ることを意味します。

マエストリーヨたちの任務は、幼稚園から高校までを視野に入れた、包括的な大衆教育の代替モデルを構築することでした。生徒の多くは、いわゆる「教育制度からあぶれた子どもたち」であり、公式な学校制度に入ることができなかった若者たちでした。

この取り組みには、成人教育のための新しく革新的な学習スタイルの設計と実践も含まれており、さらに都市の周縁部に暮らす若者たちのための生産的なプロジェクトづくりも進められました。私たちが「フォメント」と呼んでいた新しい組織の初代ディレクターであるイエズス会のウンベルト・バルケラ神父は、私をこのプロジェクトの責任者に任命しました。

この活動には、私たちイエズス会の修道士に加えて、聖心会の修道女たち、アフスコ地区に住む一般住民、そして外部から加わった専門職の信徒たちが協力していました。私が最初に立ち上げた成人教育グループは、新しい家(段ボールの仮住まいに代わる住居)の建設に携わっていた建設労働者たちで構成されていました。私たちはブラジルの教育者パウロ・フレイレの手法に基づいた「文化サークル」を用いて学習を進めました。

そのグループの中心にいたのが、サルバドル・ウエルタ、通称「チャバ」という人物で、非常に聡明で、学びたいという強い意欲を持っていました。彼はアンパロという女性と結婚しており、私は最初から二人ととても親しい関係を築いていました。アンパロは、メキシコ社会保障庁(IMSS)のクリニックで医療ミスにより亡くなりました。私はチャバのそばにいて、病院でその知らせを一緒に受け取りました。あれから50年以上が経った今も、私たちは交流を続けています。

アフスコの住民たちの多くは、オアハカ州やミチョアカン州から移住してきた人々でした。彼らは、自分たちの区画にある溶岩台地の凸凹を土で埋めて、少しずつ家を建て始めました。侵入(不法占拠)の初期段階から、メキシコ市内のあちこちからダンプカーが瓦礫を積んでやって来ては、ここに廃材を捨てていきました。実際、メトロ(地下鉄)建設時に出た掘削土の多くが、このコロニア(住宅地区)に運び込まれたのです。

ギジェルモ・カサスという建築家は、元イエズス会士でイベロアメリカ大学に勤めており、敷地の高低差を生かした家の設計図を作成してくれました。私たちは、ペドレガル・デ・サン・アンヘルを手がけた建築家ルイス・バラガンの住宅のように、この地区の人たちが、模範や実例を通して、従来とは異なる建築のあり方を選ぶようになることを願っていました。しかし、実際にはそうはなりませんでした。

侵入初期から土地を確保していたドーニャ・ケタという女性は、イエズス会の共同体で私たちと一緒に活動していました。彼女は毎日市場に買い出しに行き、食事を作ってくれていました。出生証明書を持っていなかったため、正確な年齢はわかりませんでした。いつも明るく親切で、彼女は私たちと地域社会を結ぶ大切な存在でした。

私の父ルベン・アギラール・モンテベルデと母アリシア・バレンスエラ・ガルシアも、よくイエズス会のコミュニティを訪ねてきてくれました。当時、父はバナメックス(メキシコ国立銀行)の役員の一でした。両親は、前回の訪問で「これが足りていない」と気づいたものを、毎回何かしら家に持ってきてくれていました。

両親が乗ってきた車は、数ブロック手前に止めなければなりません。警備スタッフもそこで車に残り、両親だけが歩いて「穴の家」まで来るのが常でした。私たちは、チャバと仲間たちが建てたその家を、親しみを込めてそう呼んでいました。父は、私たちの活動に深い関心を持っており、人々がどのようにして生活や社会的状況を改善していけるのかを知りたがっていました。

1974年、父はペドロ・メイヤーと、IPADE（汎アメリカ経営大学院）のエグゼクティブ・マネジメント・プログラムで出会いました。そこで二人は親しくなり、父が亡くなるまでその友情は続きました。父はペドロをアフスコ地区に招き、そこで暮らし働く「イエズス会士の息子」を紹介しました。ここは、きっと彼にとって印象深い場所になるだろうと語ったのです。

この本に掲載されている私のポートレートは、ペドロがその最初の訪問で、「穴の家」の中で撮影したものです。その日、私は彼にコロニア（地区）を案内しました。本書に収められている多くの写真は、その時に撮られたものです。以来、私たちはずっと友人です。

当時、アフスコの通りは半分が溶岩、半分が埋め立て土でした。週末になると、近所の住民が協力して岩を砕き、道を平らにするというのが当たり前の光景でした。舗装されていたのは、地区の出入口であり、バスが通る唯一の通りだけでした。

家々は、段ボール製の屋根や壁、積み上げた石だけの壁、あるいは建設途中のコンクリートブロック造りでした。家を広げられるかどうかは、家庭の経済状況次第でした。

コロニア全体が「建設途中」の状態、家の1階の柱の上には、いつか2階を建てるために鉄筋が突き出したままになっていました。それが当時の夢であり、希望の象徴でした。プライバシーというものは、ほとんど存在しませんでした。部屋はたいてい一つしかなく、複数の家族が共同で使っていました。ベッドもまた、何人もの家族が共有するものでした。

家は常に未完成で、週末になると家族全員で建設作業に参加しました。それぞれに役割があり、そこでの暮らしに深く根を下ろし、「ここに居続ける」という意思を形にしていたのです。誰にも、自分たちを追い出させないという決意が、そこにはありました。

侵入地域であったため、アフスコの土地には正式な所有権の証書が存在しませんでした。その代わりに、家の外壁に取り付けられた小さな看板が「所有権」のような役割を果たしていました。そこには、通りの名前、家族の名前、区画番号、そして敷地番号の4つの情報が記されていました。

道や家の絶え間ない建設作業は、「もっと良い暮らしをしたい」と日々奮闘する地域の活力そのものでした。自分たちやその子どもたちに、より良い未来を与えたいという強い願いが、そこにはありました。

当時、電気はコロニア（地区）を通っている送電線から“引いて”使っていました。各家庭に電気を届けるため、木製の柱を使って複雑な配線が組まれており、まるで蜘蛛の巣のようでしたが、それでも家

族ごとに自分たちの「線」がどれかをきちんと把握しており、印をつけて区別していたため、混乱はありませんでした。

飲料水は、地区を通る一本の水道管から得ていました。あちこちに穴が開けられ、女性や若者たちが水を汲みに行っていましたが、「水汲み人(アグアドーレス)」を雇って、バケツで水を届けてもらうこともできました。水は非常に大切に扱われており、それはまさに貴重で贅沢な資源でした。多くの家では、雨水をためるため、屋外に古い浴槽を置いていました。

当時の家では、何ひとつ無駄にされることはなく、すべてに再利用の可能性があります。物は、形を変えながら何度も使われ、捨てられることは稀でした。そこには、必要に迫られた経済的合理性がある一方で、創造と工夫そのものを楽しむ喜びも存在していました。想像力は、コミュニティ全体が共有する文化的財産だったのです。

家々の外に干された洗濯物は、アフスコの風景の一部でした。黒い溶岩石と灰色のブロックに囲まれた中で、シーツやシャツ、ズボン、ワンピース、下着の色彩が、町の表情に彩りを添えていました。

日中は、人の気配がまばらでした。基本的に「ベッドタウン」としての性格が強く、住民のほとんど、特に男性たちは日中仕事に出て、夕方から夜にかけて帰ってきました。それでも、地域内にはいくつかの小さな生産活動が行われていました。

手作りの看板には綴りの間違いも多く見られましたが、同時にたくさんの創意工夫がありました。家の前の小さなテーブルひとつだけの店、鶏肉屋、家庭料理の販売、美容室、自動車修理、タイヤ修理。そして需要の高い窓やドアをつくる鍛冶屋、何でも直せる修理工房もありました。あらゆる物が修理対象となり、リサイクルと再利用の文化は、ここでは当たり前の実践だったのです。

共和国の首都であり、国で最も重要かつ発展した都市であるメキシコシティにおいても、貧困は確かに存在していました。それはソカロ(中央広場)からさほど遠くない場所、まさにこのアフスコ地区にありました。侵入地区として始まったこのコロニア(住宅地)は、当初、行政から正式に認められておらず、そのため公共サービスを提供する義務を行政は感じていなかったのです。

しかし、住民たちは厳しい現実と向き合いながらも、日々の生活の中に希望を見出していました。未来に対して前向きで、自分たちは「勝者」だと感じていたのです。かつて農村での生活の中で味わっていた困窮を乗り越えたという実感は、大きな誇りとなっていました。

彼らは常に、「今の方がずっと良い」と口にしていました。子どもたちが学校に通えるようになり、場合によっては大学にまで進学することも可能になりました。緊急時には病院に行くこともできる。都市生活には、自分たちの土地と家という「財産」があり、それを得たことに後悔はありませんでした。

とはいえ、出身地とのつながりを断つことはなく、家族の一部は今も田舎に住んでいました。故郷の村を訪れるための帰省や、伝統的な宗教行事に参加するための旅は、ごく自然な習慣として続けられていました。

彼らは、自分たちが新しい文化 — 都市文化 — を意識的に受け入れていることを自覚していましたが、生まれ育った文化を軽んじることはありませんでした。視野は広がり、世界の見え方も変わっていきましたが、自分たちには明確な「出自」と「過去」があり、それは日々の暮らしの中にさまざまな形で生きていました。その最も日常的な形のひとつが、故郷の郷土料理でした。

私たちが担っていた教育プロジェクトの中で、さまざまな代替教育の取り組みが設計され、実行に移されていきました。そのひとつが、マリア・アデラ・オリベロスとアナ・フランシスカ・パロメラという2人の修道女によって創設された、大人のための遊び心ある学びのサークルでした。このグループは、コロニア内で定期的に場所を変えながら活動していました。

私たちのコミュニティには、アメリカ合衆国、中南米からもイエズス会士が見学に訪れました。彼らは、パトリア学院の閉鎖後に何が築かれているのかを実際に見てみたいと願っていたのです。また、メキシコ国内外の教育研究者たちも訪問にやって来ました。

やがて、外交官のホルヘ・パラシオスとそのパートナー、クリスティーナ・ゴダールも、定期的に足を運ぶようになりました。彼らは金曜や土曜の夜にやって来て、いつもウイスキーかコニャックを一本持ってきました。集いは深夜を超えて朝方まで続くことも珍しくありませんでした。

そんなある日、まったく予想していなかった出来事が起きました。アフスコの住民たちは一斉に恐慌状態に陥ったのです。理由は、連邦区の信託機関フィデウルベ (Fideurbe) が突然現れ、「土地を正規化する」と告げたことでした。しかしその前に、「土地代を請求する」と言われたのです。

住民の多くは、かつて侵入という形でその土地を得ていましたが、なかには「譲渡金」を支払って取得した人もいました。すぐさま住民たちは団結し、この事態に立ち向かおうと動き始めました。彼らにとって、すでに「自分たちのもの」となっていた家と土地を失う可能性は、極めて重大で現実的な危機だったのです。

新たに構築された組織体制は、街区 (マンサーナ) ごとに代表を選出するというものでした。至る所で、男女を問わず地元のリーダーたちが現れました。それ以降、毎週のように街区代表と希望者が参加する集会が開かれるようになりました。

私たちの教育プロジェクトの理念では、「社会的行動のための教育」が必要だと考えていました。フィデウルベの脅威に直面する中で、住民たちは突然、自分たちの現実に対する新たな意識を持ち始め、公共の利益の構築に関わろうという関心が芽生えたのです。

この経験を通じて、私たちは教育に対する考え方を転換し、「意識化を目指す民衆教育は、“人々を教育する社会的行動”を創り出すことで成立する」と唱えるようになりました。このテーマは民衆教育の分野で注目され、議論が活発化し、ついにはメキシコの国境を越えて広がっていきました。

住民運動によって始まった交渉の結果、フィデウルベの提示した条件は価格も支払い期限も妥当なものとなり、誰一人として土地を失うことはありませんでした。全員が自分の土地を合法化することが

できたのです。これはまさに成功の物語でした。こうして、住民たちは正式な権利書を手にし、自らの資産を売却可能な“財産”として持つに至りました。

さらに、正式に認可された地区となったことで、公共サービスが次々と導入され、舗装された新たな道路や大通りも開かれるようになりました。この数年間で、コロニアは計画性に欠ける無秩序な変化ではありつつも、急激に、そして確実に変貌していったのです。それは、他の地域でも同様に起こっている現象でしたが、確かな前進でした。

私は「アフスコ・プロジェクト」の責任者として3年間、教育者(マエストリジョ)として活動しましたが、1975年からは神学の勉強を始めることになりました。その後、他の若いイエズス会士たちが、教育・社会活動を引き継ぎました。神学の勉強のため、私は引き続きコロニアに住みましたが、その時にはすでに「復活の教会」にあるイエズス会の住居に移っていました。管区長はこの家を神学生たちの住まいとすることを決定しました。

神学の勉強と並行して、私たちはイペロアメリカ大学で社会学の修士課程にも取り組んでいました。

社会科学・政治学部との合意により、講義をコロニア内で実施することができました。そこには、同じコースに登録していた他の学生たちも通って来ていました。講師陣には、優れたメキシコ人教師のほか、チリやボリビアからの亡命者たちも含まれていました。彼らは、コロニアの現実に深い衝撃を受けていました。

その中の一部のグループは、ホルヘ・アロンソ・サンチェスの指導のもとで調査を行い、その成果は『都市闘争と資本の蓄積』(カサ・チャタ出版社、1980年)<sup>4</sup>という書籍にまとめられました。この本は、間もなくして都市人類学の分野において世界的な古典となり、コロニア・アフスコで実際に起こった出来事を、理論的な解釈を交えつつ、正確かつ詳細に記録したものです。そしてそれは、まさに私が体験した現実でもありました。

私は1972年から1978年までの6年間をその地で過ごしました。人生の中でも極めて重要な時期でした。何よりもかけがえのないのは、さまざまな年齢層、さまざまな地方から来た人々との共同生活でした。彼らは、日々、そして私に対しても、誇りと人間の偉大さを教えてくれました。

彼らは、貧困にあえぐ農村を離れ、自分たちとその子どもたちのために、より良い生活を求めてやってきたのです。まったく知らない都市に、しかも溶岩だらけの不毛な土地にたどり着き、そこを住める場所に変えなければなりません。彼らは常に前を向き、家や道を自らの手で築き上げていきました。

そしてまた、田舎での生活から持ち込んだ価値観と、都市のダイナミズムや厳しさを融合させ、新たな文化を築いていきました。それはまさに、独自で新しい文化的統合体でした。彼らの子どもたちは、この独特な生き方から生まれた存在であり、それは確かな“出自”と“歴史”を持っているのです。

2000年、ペドロと私は26年ぶりにアフスコ地区を再訪した。同じ場所でありながら、どこか違っていた。目に見える変化があった。そして、その変化は確かに前向きなものだった。舗装された通りが増え、公共サービスも整い、学校や診療所、さらには病院やジム、コンピューターセンター、レストランまでもができていた。かつて見られた段ボールの家々は消え、代わりに何階建てものしっかりした家々や建物が建ち並んでいた。

ペドロの写真—中には26年後にまったく同じ場所で撮影されたものもある—は、こうした現実を雄弁に物語っている。私たちは、かつてのご近所、ドーニャ・ケタを訪ねた。彼女は病気だったが、笑顔は昔と変わらなかった。

今でも私は時折アフスコを通る。だが、私がかつて暮らし、働いていたあの場所とはまったく様変わりしてしまった。どこがどこだったか、見当がつかないほどだ。それでも私は希望を持ってこう思う。1970年代の住民たちに根付いていたあの前向きな姿勢こそが、今日のメキシコの変化を象徴しているのだと。確かに、問題も格差もまだ存在している。だが、それでも、かつてに比べれば状況は改善されている。

ペドロがアフスコとその人々に捧げたこの本は、かつて存在したメキシコの記録である。そして、写真がその証しとなっている。同時に、それはまた、個人と集団の努力によって変化し、より良くなった現実の物語でもある。アフスコの人々こそが、その新しい国を築き上げた真の建設者なのだ。

「パトリア学院閉鎖の良い点、悪い点、そして醜い点」、『エル・セマナリオ』。最終更新日：2023年6月15日。<https://www.elsemanario.com>

パウロ・フレイレ。ウィキペディア。最終更新日：2024年12月6日。  
[https://es.wikipedia.org/wiki/Paulo\\_Freire#Alfabetizaci3n\\_cr3tica](https://es.wikipedia.org/wiki/Paulo_Freire#Alfabetizaci3n_cr3tica)

ルイス・バラガン。『ファーレンハイト・マガジン』。最終更新日：2021年11月22日。  
<https://fahrenheitmagazine.com/arte/arquitectura/luis-barragan-una-oda-al-entorno-volcanico>

『都市闘争と資本の蓄積』。クリオニカス・カルメシ。最終更新日：2021年3月。  
<https://cronicas-carmesi.blogspot.com/2021/03/lucha-urbana-y-acumulacion-de-capital.html>

デルモンテ  
ペドロ・メイヤー著

伝説的なアバンダロ・ロックフェスティバルからそれほど時間は経っていなかった。そこで私は、メインステージの周辺に何日もキャンプを張る、20歳前後の若者たちの波を目の当たりにした。彼らの主な食糧は缶詰であり、当時はまだファーストフードチェーンが普及していなかったため、缶が食べ物をキャンプに運ぶ主要な手段となっていた。

ちょうど同じ頃、アメリカのアーティスト、アンディ・ウォーホルは、キャンベルスープの缶をモチーフにした著名な連作を制作していた。日常生活の象徴であり、缶詰文化への賛歌であるその作品は、ポップアートの象徴となった。ウォーホルは日常的な物を芸術作品に変えることで、「芸術とは高尚なテーマを描くべきだ」という従来の概念に挑戦し、芸術の限界と可能性について議論を呼び起こした。

今日、アフスコの住民がトマトソースのデルモンテの空き缶をリサイクルして、美しい観賞用の植木鉢に作り変えた写真を見ると、その創造的で芸術的な視点に敬意を表さずにはいられない。ギャラリーや美術館を必要としない自由な表現だ。アフスコは昔からリサイクルの場であり、現代が環境責任として注目する何十年も前からそれを実践してきたのだ。

## 時間と星々

サルバドール “チャバ” ウエルタ著

誰もがそれぞれの物語を持っている。これは私の物語だ。孫娘たちが「どうしてこうなったの？」と尋ねた。すべてがどう始まったのか、どうやってやり遂げたのか、教会はすでにあっただのか知りたかったのだ。でも、いや、何もなかった。

ラ・カンデラリアの村を過ぎると、そこには火山と石しかなかった。黒く荒涼とした風景だった。まっすぐ歩くことはできなかった。歩くとたびに大きな穴にぶつかり、また別の穴、また別の穴が続いた。巨大な穴を避け、あるいは越えられない山を迂回しなければならなかった。ラ・カンデラリアの村人たちは、溶岩の土地を提示された価格で売り、その後、人々はまだない道をどう造るかを思い描き始めた。

隣人たち自身がラ・カンデラリアの住民と組織を作った。彼らは土を運ぶトラックを買うために金を集め、穴を埋め、溶岩の山を平らにした。こうして徐々に、コロニアを横断し、人々が物資を求めて行き来したラ・カンデラリアの主要な通りと繋がる最初の道を開くことができた。その道は新しく未舗装の土の道だったが、始まりだった。

その道はいつも人で溢れていた。朝4時から夜11時まで、働きに出かける人たちで賑わっていた。私の家族は電気も時計も何もない生活を送っていた。私は、光も設備もない故郷の農場で学んだ天文学の知識に頼って生活していた。星、とくに明るい金星を使っていた。山の上の金星の位置で時間を計っていた。金星がある高さにあるのを見れば、朝4時だと分かった。それが仕事に出る合図だった。

道のりは簡単ではなかった。私たちは数キロ歩いてトラルパン大通りやディビシオン・デル・ノルテまで行き、そこでようやく交通機関に乗ることができた。帰りは夜の10時から11時の間だった。見える唯一の光は夜明けの光で、日曜はサッカーをせず、むしろ眠ることを選んだ。

アフスコの最初の通りは、人の流れが絶えず、星たちが時間を示しながら照らしていた。その行き来の中で、挨拶が交わされ、会話が生まれ、問題解決の糸口が見つかった。

土地は正確に区画され測量された。土地の売り手たち自身が広い道を計画し、今も残る名前を付けたのだ。

## 略歴

### ペドロ・メイヤー

若い頃から写真家を志したが、正式な写真学校がなかったため独学で学んだ。彼の歩みは、技術と視覚的物語の間を絶えず探求する旅であった。彼はグループ・アルテ・フォトグラフィコ(写真芸術グループ)を創設し、初のラテンアメリカ写真コロキウムを推進、さらにメキシコ写真評議会を設立した。

その後、インターネット上で写真を展示する最初のサイト「ZoneZero」を開発し、1500人以上の作家の作品を公開した。写真を記憶するための初のCD-ROM『Fotografio para recordar』の先駆けでもあり、彼の回顧展『Herejias』は17か国の60以上の美術館で開催された。

また、ペドロ・メイヤー財団とフォト・ミュージアム・クアトロ・カミノスの設立にも尽力した。2020年からは、『ミラマール・コレクション』に取り組んでおり、これは60年以上の作品を収めた40冊以上の書籍シリーズであり、イメージ、記憶、そして絶え間ない変革の時代における生き方について考察している。

### ルベン・アギラール

ルベン・アギラールは、政治・社会コミュニケーションの分野で卓越した経歴を持つメキシコの学者、ジャーナリスト、コンサルタントである。かつてイエズス会士であり、エルサルバドルのゲリラでもあった。ビセンテ・フォックス政権下では大統領府のスポークスパーソンを務めた。

イベロアメリカーナ大学で社会科学の博士号を取得し、大学教授として教鞭を執ったほか、政府のコミュニケーション戦略の専門家として活躍し、国際機関のコンサルタントも務めている。20冊以上の著書があり、国内の主要メディア『Animal Político』や『Nexos』などで定期的に執筆している。

### サルバドル・ウエルタ

彼は労働と大地に深い結びつきを持つ人物です。幼少期から農業や畜産に携わり、16歳で正式に石工の仕事を始めました。アフスコ地区の建設において重要な役割を果たし、地域コミュニティのリーダーとしても際立っていました。

20年以上にわたりメキシコシティで主要な造園やメンテナンスプロジェクトを監督し、2000年以降は写真家ペドロ・メイヤーと密接に協力しています。

#### アレクシス・オルティス

彼は多分野にわたる視覚アーティストであり、その創作活動は知覚、想像力、記憶、時間と空間の概念を軸に、現実を構築する方法を問う物語を創造することに焦点を当てています。彼の作品は、ビデオアート、ビデオインスタレーション、作家写真、実験音楽、テキストの執筆、詩を通じて展開され、デジタル化された文化の文脈において、人間、技術、自然の交差点を探求しています。現在は、ペドロ・メイヤーと協力し、書籍シリーズ「ミラムール」の編集デザイナー兼編集者として活動するほか、カサ・コヨアカン・ギャラリーのキュレーションと展示設計を担当しています。

#### シメナ・サンパヨ

メキシコ国立自治大学(UNAM)美術デザイン学部で視覚芸術を専攻。常に変化し続けるイメージを表現手段として探求する、新世代のビジュアルクリエイターの一員である。彼女の作品を通じて、共感的でダイナミックな世界観を描き出し、絶え間なく変わる万華鏡のような視覚体験を表現している。

現在はペドロ・メイヤーのアシスタントを務め、『ミラマール・コレクション』のいくつかの作品の編集も担当している。

#### ミラマール・コレクション 今後の刊行予定タイトル

- アルゴリズム
- 自画像
- アバンダロ 1971年
- キューバ 1979–2009(第1巻・第2巻)

- ここからあちらへ
- 1968年の記録
- ユニバーサル劇場
- 記憶のための写真
- ウェフトウラ
- イシュトリルコ・エル・グランデ
- ミシュテカ地方
- ラサロ・カルデナス市のマス
- ロケットは一日中飛び続けた — 改訂版
- サンディニスタ証言 1978–1984
- エクアドル 1982–2010(第1巻・第2巻)
- ヴィルジリオ
- ユマ 1984–1989

そして、他に制作中の23タイトル

ミラマール・コレクションのタイトルについて詳しく知りたい方は、QRコードをスキャンしてください。

このコレクションにご協力くださったすべての皆さまに感謝申し上げます。



**【注記】**

著者より:

本書の校正ミスについてはすべて私の責任であることをお伝えします。誤りを完全に避けるための十分な手段がないことは自覚していますが、それでも本書を出版したいという想いが誤りのリスクを上回りました。読者の皆様には、完璧さと最大限の努力の間の繊細なバランスに対してご理解をいただければ幸いです。

ペドロ・メイヤー財団(Fundación Pedro Meyer, A.C.)は著作権と権利保護を支援しています。これらは創造性を刺激し、思想や知識の多様性を守り、自由な表現を促進し、生きた文化を育むものです。

本書の正規版をご購入いただき、著作権法を尊重していただきありがとうございます。皆様のご協力が作者やクリエイターを支え、財団が文化事業を継続していく力となります。

本書に収められた写真の大多数はペドロ・メイヤーの作品です。

本書は2025年8月にメキシコ・オアハカのRepro.Gráfica, S.C.工房で印刷が完了しました。

© コロニア・アフスコ、ペドロ・メイヤー  
初版、2025年

本版は300部の限定ナンバリング版で構成されており、  
そのうち99部には直筆サイン入りのオリジナル写真が含まれています。

番号: \_\_\_\_\_



PEDRO MEYER